

令和 5 年 6 月 17 日現在

機関番号：32408

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2019～2021

課題番号：19H04383

研究課題名（和文）自然災害からの復興過程における観光の役割に関する研究

研究課題名（英文）Research on the Role of Tourism in the Reconstruction Process from Natural Disasters

研究代表者

海津 ゆりえ (Kaizu, Yurie)

文教大学・国際学部・教授

研究者番号：20453441

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 9,900,000円

研究成果の概要（和文）：自然災害からの復興過程における観光は、原因と被害のタイプ、発災から経過した時間、被災を取り巻く社会的環境、当該地域における観光の熟度、等の条件により多様に展開する。宮古市では語り部観光が生まれ、やがて観光まちづくりに変容して次世代に引き継がれている。裏磐梯（火山）では磐梯山噴火後に初期の復興事業が行われた頃の植生景観を明らかにし「復興観光」に関わる温泉事業や植林事業の経緯をまとめた。東日本大震災津波被災地における海岸防災施設復旧事業における環境配慮に関する事業を類型化し、観光も含む多面的機能の重要性を指摘した。冷害常襲地の二戸市では、飢饉に備える植物知識の豊富なストックを確認した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、自然災害の種類や災害発生からの時間経過が異なる複数の地域において事例研究を行っている。このことにより時間経過に伴う観光の変容について段階的な整理を実践した。また観光心理学、教育学、生態学、災害心理学など諸分野からの知見を取り入れた分析を行ったことにより、災害復興における観光の位置づけについて多角的に捉えることができた。また災害備荒録や磐梯山噴火後の植林活動に関する文献の掘り起こしなど、観光研究に多様なアプローチが可能であることを実証し得た。

研究成果の概要（英文）：Tourism after natural disaster develops in various ways depending on conditions such as (1) the cause and type of damage, (2) the amount of time that has passed since the disaster, (3) the social environment surrounding the disaster, and (4) the maturity of tourism in the area concerned. Storytelling tourism was born in Miyako City, which eventually transformed into tourism town development and has been passed down to the next generation. In Urabandai (volcano), we clarified the vegetation landscape at the time when the initial reconstruction work was carried out after the eruption of Mt. He categorized the projects related to environmental consideration in the coastal disaster prevention facility restoration projects in the areas affected by the Great East Japan Earthquake and Tsunami, and pointed out the importance of multifaceted functions.

研究分野：エコツーリズム

キーワード：自然災害 復興ツーリズム 防災教育 災害備荒録 観光 岩手県宮古市 岩手県二戸市 磐梯山

1. 研究開始当初の背景

(1) 申請時における社会状況と本研究の背景

本研究を申請した2018年当時は、東日本大震災発生から7年後、熊本地震から2年後にあり、自然災害からの復興過程にある地域をどのように支えるのかというテーマは多様な領域で研究されるテーマであった。本研究課題は、観光を主軸としてこのテーマに挑んだものである。

東日本大震災発生直後、自然災害後の観光は、地域が安定を取り戻した後に再開するものという捉え方が主流であった。やがてこの風潮は徐々に変化し、復興途上においても観光が実現可能であること、また観光が果たせる役割があるとの認識が浸透していったが、研究メンバーらはこのことに早期から気づいており、復興に貢献する観光にはどのようなものがあるのか、地域にとってどのような意味や役割があるのかを継続的に考え、各地で調査研究や各種プロジェクトに関わってきた。そこで、自然災害からの復興過程と観光の関係について理論的整理を行うことを目指した。その上で「復興観光(復興ツーリズム)モデル」を描き、さらにその有効性を検証することを目指し、本研究の起案に至った。

(2) 背景となる研究

本研究の背景には、ア・イ・ウの3つの研究が存在する。

研究アは、研究分担者の橋本が代表を務めた「自然災害に対する観光地の「災害弾力性」に関する評価指標の開発」(2016年度基盤研究B)である。災害復興過程において観光は3つのエンジン(精神・経済・教育)となることを核とした研究仮説(図1)を設定し、国内外の被災履歴をもつ観光地を対象とした調査研究を進めてきた。この研究から得た着想は、災害からの復興過程において、被災前には気づかなかった多様な観光資源が発見・創出されうること、災害からの復興プロセスで展開される観光は、地域にとっての精神的・経済的エンジンとなるだけでなく、観光者に伝える活動(語り部など)を通して災害の記憶や教訓が繰り返し想起されることで、地域の防災力の継承に寄与する“教育的エンジン”になりうることである。本研究はこの2点を具体的な事例によって証明することを目指した。

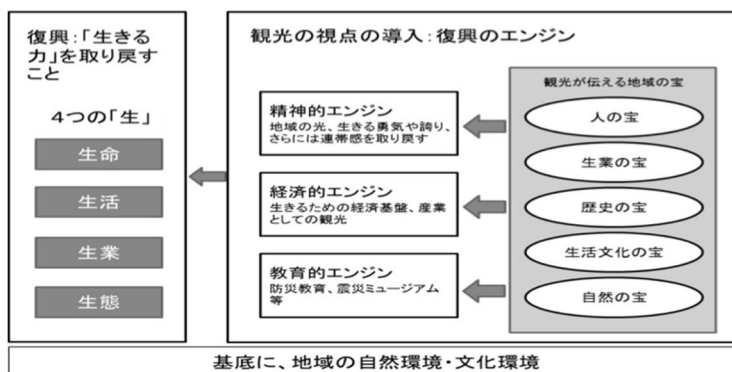


図1 研究アの仮説図

研究イは、研究代表者の海津が代表を務めた「海岸観光地の地震津波発生時における対観光者リスクマネジメントに関する研究」(2016年度基盤研究C)である。地震津波常襲地である湘南を対象に、地震津波発生時における対観光者避難政策と日常的な災害リスクマネジメントおよび観光者意識の分析を行った。その結果、有名観光地(鎌倉など)であるほど観光地側は自然災害の伝承やリスクの伝達を手控える傾向にあり、災害リスクを「伝えない」ことにより観光者の災害リスク意識を低く抑える傾向にあることを把握し、「観光」の二面性を明らかにした。

研究ウは、研究代表者の海津が執筆した「被災地観光に見る自然災害からの守りの伝承文化「語り部観光」を題材に」(『環境復興』第8章、pp119-132.八朔社(2018))である。東日本大震災後の被災各県の沿岸部で「語り部」が活動を活発化させ観光協会等が窓口を担う等、復興途上にある被災地の観光の重要な側面となったことを指摘した。

以上の各研究で得た成果や考察が本研究の出発点となっている。その一つは、自然災害の被災地で発生する復興ツーリズムには多様なタイプがあるが、災害からの時間経過に伴ってその内容は変化すること、特に「語り部観光」においては顕著にそれが現れることである。また湘南の事例からは、発達した観光都市においては災害を伝えることを控える可能性があることである。もう一つは、復興ツーリズムは地域住民や観光者の意識・行動に影響を及ぼしうることである。本研究は、これらの仮説を出発点として、さらに事例を収集してその成果をもとに考察を深めることとした。

2. 研究の目的

以上の問題意識より本研究は次の研究1~4を行い、「復興観光モデル」の有効性を検証することとした。

(1) 被災地における復興過程で発生した「復興観光」のタイプと経緯の時系列分析

被災地の復興過程で実施される観光は、復興に必要な「回復力」を高め、「抵抗力」の継承・強化に寄与しうるか。寄与するとすれば、どのような観光のタイプやプロセスが有効と考えられ

るのかを明らかにする。一般に、被災地では発災直後からボランティアが多数訪れ、救災期が過ぎると徐々に観光者が入るようになって考えられているが、実際にはボランティアの延長で地域を訪れることも頻繁にあることであり、両者の明確な区別はしにくい。そこで本研究では地域外から関わる者としてボランティアも含めて扱う。

(2) 「語り部観光」を通じた被災地と観光の関わり方の分析

被災地に復興過程の初期段階で生まれ、その後継続して実施されることが多い「語り部観光」に着目し、語り部がどのような観客で災害と復興をとらえ、また時間経過に伴って伝えようとするものがどのように変化してゆくのかを明らかにする。

(3) 「復興ツーリズム」が地域住民や観光者の意識・行動に及ぼす影響に関する分析

「復興ツーリズム」を受け入れてきた地域では、観光の導入により地域住民や観光者の意識・行動をどのように変えてきたのかを明らかにする。

以上の研究 1~3 を踏まえ、自然災害からの復興過程における観光の関与のプロセスの多角的に分析する。観光が復興に果たす役割、復興過程が新たな観光の創造、災害のタイプおよび観光のタイプによって異なる点と共通する点があると予測されるが、それらを踏まえた原則を導き、被災地における観光の関与のあり方について総合的な考察を行い、「復興観光モデル」の有効性を検証する。

なお本研究における調査対象地域は表 1 の通りとした。いずれも復興過程で多様なかたちで観光を取り入れ、教育効果と経済効果の双方を実現している地域である。セントヘレンズ山は磐梯山と類似した噴火被災地であることから、海外と日本の比較対象として事例地域に加えたものである。

表 1 本研究の調査対象地域と研究テーマ

種類	対象災害	調査対象地	研究		
			1	2	3
冷害	北東北（江戸時代）	岩手県二戸市（旧南部藩）	○		
地震	兵庫県南部地震（1995）	兵庫県神戸市	○	◎	
	集集地震（1999）	台湾南投県桃米村	○		
津波	東北地方太平洋沖地震（2011）	岩手県宮古市他沿岸諸都市	○	◎	○
噴火	磐梯山（1888）	福島県磐梯町・猪苗代町・北塩原村	○		◎
	セントヘレンズ山	米国ワシントン州シアトル市	○		

3. 研究の方法

本研究は、上記の研究テーマに沿って各メンバーそれぞれのフィールドで調査を行い、年 2 回の報告会で成果を共有する方法を原則とした。なお研究を通じて次世代の研究者を育成する目的から、研究会には学生の参加を促した。

4. 研究成果

(1) 研究実績

実施した研究及び成果は以下のとおりである。

黒沢は、1888 年の磐梯山噴火後に、初期の復興事業が行われた頃の植生景観を明らかにし、「復興観光」に関わる温泉事業や植林事業の経緯をまとめた。東日本大震災津波被災地における海岸防災施設復旧事業における環境配慮に関する事業や取り組みを類型化して、観光も含む多面的機能の重要性を指摘した。

橋本・海津は、福島県の磐梯山周辺地域において、1888 年の磐梯山噴火後に、自然の脅威と豊かな恵みの両方に目を向け、「自然災害大国」に暮らすための防災意識を高めて教訓を伝承するための手立てとして観光が有効であることを、モニターツアーの開催や、フェノロジーカレンダーの制作プロセスを通して検証した。併せて、研究を通して大学が地域に継続的にかかわることと、地域の教訓を、学生を通してひろく伝承していくことの可能性を見いだすことができた。

押田は、関東地方および中部地方の自治体における防災教育の指導教本を調べることにより、災害がどのように教育現場で捉えられているかを明らかにした。また「防災カルタ」が全国にどの程度作成され、継承されているかを調べた。その結果、防災教育として伝えられる防災の内容が災害の概要にとどまっていること、カルタは制作意欲に反して継承に課題を抱えていることを明らかにした。

海津・橋本は、岩手県宮古市における現地の定点観察を通して、東日本大震災以後に特徴ある復興ツーリズムとして始まった「学ぶ防災」及び「黒森神社ウォーク」が人々の関心を宮古市に惹きつけていること、復興ボランティアが立ち上げた高校生によるまちづくりの拠点に着地型観光やゲストハウスのオープンなどに展開することをとらえた。2020 年・2021 年はコロナの影響で現地調査が中止となったが、2021 年には現地との間でオンラインツアーを実施した。そのことにより、現地と研究チームのつながりが多様化し、かつ深まることを参与観察として体験した。復興ツーリズムは双方の人的つながりによって展開・衰退することを把握した。

真板・海津は、岩手県二戸市において過去の冷害の体験から東北一円の諸藩に伝えられている救荒作物の知恵がどの程度継承されているかを明らかにするため、本草に食用として記載されている植物に対する認知度と関わりを特定集落で調査する準備を進めた。

室崎は、イタリアや熊本をはじめとする内外の歴史的な災害（約 20 事例）における復興を、歴史的文化との関りで分析し、復興における観光の役割を明らかにした。

(2) 研究成果

受けた自然災害のタイプによって、復興が意味するところや目指す姿が異なることが明らかとなった。

火山噴火の場合は、生活基盤である土地そのものが大きく改変されることから、それ以前の日常生活に戻ることは困難である。橋本・海津の研究により、磐梯山における研究結果より、比較的記憶が新しい土地では、災害からいかに「生き残る」か、不毛の大地となった場所でどのように「生き延びる」かが重要な知恵であることが明らかとなった。また噴火後の大地をどのように「蘇らせる」かについて、黒沢は植林活動と温泉（観光）という事業を通して達成してきた裏磐梯の歴史から明らかにした。そこでは被災した住民以外のプレイヤーが外から流入する必要があることが示唆された。裏磐梯での事業は今日の観光地としての同エリアの産業につながっている。

地震津波の場合は、災害そのものは数十年～100年単位でインターバルを持って訪れるが、被災当初は人々への生活面、精神面、経済面へのショックは大きい。海津・橋本の研究より、当初は災害を伝える観光が立ち上がるが、やがて生業と結びついた祭りや遊覧などの観光が戻ってくることで、まちづくりとして災害をどのように伝え、生かしていくかを考えるプレイヤーが育つことを明らかにした。一方で、コロナ禍の経験により、外部者とのつながりがあることが復興ツーリズムをも支えていること、オンラインにせよつながりを保つことが被災地の人々の精神を支えることを明らかにした。

一方で、生きる知恵につながる防災教育は、教材化することによって情報が固定され形骸化しやすいこと、継承されることが少ないという事実を明らかにした。

本研究は、研究期間の初年度終盤の2019年12月から終了時の2022年3月（1年延長）までの2年3ヶ月をコロナ禍で実施することとなり、多くの研究が予定通り履行できずに終了した。例えば、比較調査を予定していた海外調査地（台湾、米国）は中止し、岩手県二戸市、岩手県宮古市においても現地調査は断念することとなったのは残念である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 黒沢高秀	4. 巻 49(8)
2. 論文標題 平常時を見据えた復旧事業・復興事業：福島県における生物多様性保全のケーススタディー	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 財界ふくしま	6. 最初と最後の頁 181-193
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 黒沢高秀・阿部武・山ノ内崇志	4. 巻 32(2)
2. 論文標題 田口亮男資料に基づく1888年噴火後の磐梯山北側斜面およびその周辺の植生景観の推定	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 福島大学地域創造	6. 最初と最後の頁 215-232
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 室崎益輝	4. 巻 496
2. 論文標題 世界の災害事例から学ぶ～台湾921地震からの復興	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 建築とまちづくり	6. 最初と最後の頁 2
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 室崎益輝	4. 巻 499
2. 論文標題 世界の災害事例から学ぶ～北但馬地震からの復興	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 建築とまちづくり	6. 最初と最後の頁 2
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 室崎益輝	4. 巻 500
2. 論文標題 世界の災害事例から学ぶ～函館大火からの復興	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 建築とまちづくり	6. 最初と最後の頁 2
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 橋本俊哉	4. 巻 221
2. 論文標題 新型コロナ禍に「観光」を見つめ直す	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 海外運輸	6. 最初と最後の頁 28-32
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 橋本俊哉	4. 巻 22
2. 論文標題 火山災害の痕跡の観光対象化に関する研究 - 磐梯山1888年噴火を題材として	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 立教大学観光学部紀要	6. 最初と最後の頁 32-41
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 原艶艶・海津ゆりえ	4. 巻 32
2. 論文標題 自然災害におけるガイドの危機管理に関する一考察 中国の九寨溝におけるガイドを事例として	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 第34回日本観光研究学会全国大会学術論文集	6. 最初と最後の頁 449-452
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石田健太・押田佳子	4. 巻 2019
2. 論文標題 災害復興計画における観光への配慮事項に関する研究 兵庫県南部地震以降の災害に着目して	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 第63回日本大学 理工学部学術講演会予稿集	6. 最初と最後の頁 375-376
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 黒沢高秀・山ノ内崇志
2. 発表標題 東日本大震災で復旧された海岸防災施設のGIとしての可能性
3. 学会等名 "グリーンインフラ・ネットワーク・ジャパン全国大会 公募ミーティング「砂浜海岸エコトーンにおけるグリーンインフラ：東北地方太平洋沖地震津波被災地からの報告」"
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 室崎益輝・橋本俊哉・江面嗣人・橋本裕之・清野隆・丸谷耕太・黒沢高秀・海津ゆりえ・丹治朋子・真板昭夫	4. 発行年 2021年
2. 出版社 創成社	5. 総ページ数 178
3. 書名 「復興のエンジン」としての観光 - 「自然災害に強い観光地」とは -	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	川田 佳子 (押田佳子) (Kawada Keiko) (10465271)	日本大学・理工学部・准教授 (32665)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	橋本 俊哉 (Hashimoto Toshiya) (50277737)	立教大学・観光学部・教授 (32686)	
研究分担者	黒沢 高秀 (Kurosawa Takahide) (80292449)	福島大学・共生システム理工学類・教授 (11601)	
研究分担者	真板 昭夫 (Maita Akio) (80340537)	嵯峨美術大学・芸術学部・名誉教授 (34322)	
研究分担者	室崎 益輝 (Murosaki Yoshiteru) (90026261)	兵庫県立大学・減災復興政策研究科・教授 (24506)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関